

Two young men, with two dogs as big as polar bears, were walking through a trackless mountain woods path.

Guessing from their rifles strapped across their shoulders, it looked like they entered this mountain to hunt.

Since the mountain was relentlessly rough, another accompanying guide hunter got separated from the two men before.

And to make things worse, the two companion dogs got exhausted and eventually passed out, foaming at the mouth.

"Hey, I think we should just go back."

"I was thinking the same thing. It's getting cold and I am hungry. Let's just head back."

"Alright!"



However, because they were too deep in the mountains, they weren't really sure exactly where they were and in which direction they should go to get back to the lodging.

Suddenly a gust of wind blew by. The grass was soughing, the leaves were rustling, and the trees were creaking.

"Oh boy, I am starving. My sides have been aching for a while now."

"Yeah me too. I really don't want to walk anymore. This has been so tough."

The two men mumbled in the soughing silver grass.

Just at that moment,

"What...hey look at that. What is that?"



きぎの おいしげる、やまおくの けものみちを、
ふたりの わかい おとこが、
しろくまのように おおきな いぬを
にひき つれて あるいていました。
かたに てっぽうを かついでいるところを みると、
どうやら ふたりは、かりを しに
このやまに はいったようです。
ふたりのいる やまは とてもけわしく、
もうひとりいた あんないにんの てっぽうちは、
はぐれて どこかに いてしまいました。

そのうち つれていた にひきの いぬも、
つかれて めまいをおこし、
あわをふいて たおれてしまいました。

「なあ、わたしは もうそろそろ もどろうと
おもうんだが」

「わたしも そうおもっていた。さむくなってきたし、
はらも すいた。ここで ひきあげよう」

「きまりだな！」



ところが こまったことに、あんまり やまが ふかいので、
いま じぶんが どこにいるのか、
どちらの ほうがくに いけば やどに もどれるのかが、
わからなくなってしまいました。
かぜが どおっと ふいてきて、くさは ざわざわ、
このはは かさかさ、きは ごとんごとんと になりました。

「あ～はらがへった。どうも さっきから、
よこっばらが いたくてたまらないんだ」
「わたしも そうだ。できればもう あるきたくないよ。
ああ、まいった」

ふたりは、ざわざわとなく すすきの なかで、
そんなことを つぶやいていました。

ちょうど そのときです。

「ん・・・おい みてくれ、なんだ あれは・・・」

